

KSKP **サロン・あべの** NO.56今年もよろしく **新年会**

穏やかに明けた新しい年の一月も半ばを過ぎた平成三年一月十九日(土)午後一時、年に一度、新年会でだけにお会い出来る方、毎回参加のお顔なじみの方、初めての方等々が「今年もどうぞよろしく…」とにこやかに賑やかに声を掛けあいながら、新年会会場となっている阿倍野の近鉄百貨店九階の「粹花 K・Y・K」へ。

中央の楕円形の大テーブルを中心にして十二台の手動、電動車椅子を含めて三四名が席につく。

まずは、ビールとジュースで乾杯！  
後は各々のテーブルで、会話を楽しみながらの食事が始まる。

華やぎの装いの「にゅうめん」、パリッとさわやかな「野菜サラダ」、アツアツの「カツ」、お代わりをどうぞと言われる「山菜ご飯」、「フルーツ」をいただき、心もお腹もホカホカ気分になったところでお口にヒンヤリとした「シャーベット」がこの日のメニュー。

ゆっくりと時間をかけて食事を終えて、またの出会いを楽しみに散会。

幹事さん

ほんとに ほんとに ご苦労さん

昨年暮れ、新年会の幹事さんにお会いしたとき、「今年はまた出席者が増えて、三〇名を越えそうです」と聞いた。最初の新年会は一〇名ちょっと、つぎの年が二〇名強、そして三〇名弱、だんだん増えてついに今年三〇の大会を越えた。

たくさんの人がサロンに参加してこれらすることはこのうえなくうれしい。参加したみんなが楽しく、にぎやかに出会う場にした。だから新年会の内容も、ただ飲食だけで終らせたくない。折角だから出来るだけ多くの人と話せるようにしたい。幹事さんの頭の中で、新年会のイメージは大きくふくらみ、そして、このような場作りが出来るのはサロンだけ、と自負もしたろう。はて、さて、現実には幹事さんのイメージどおりの諸々の条件を満たせたであろうか。会場選びの大へんさはもちろん、その制約から、内容が平易なものになるも止むなし。うーむ。

幹事さんのジレンマ、推して余りあると思う。ほんとに ほんとに、ご苦労さん。

(石)

# ぼくは何も 知ってはいない

岡 知史

ぼくは何も知ってはいないのだ。あの暗い夜、バクダッドの空がどれほど突然に輝き、その下でどれほどの人々が叫び恐れ、互いに押し倒しあいながら逃げていったのか、どれほどの人々が傷ついたのか、病気で歩けない人々が、長い間床にいたままの人々が、床を這うようにして逃げようとしたのかどうか、あるいは毛布を頭からかぶるようになって神に祈っていたのか、どれほど多くの子供が母親の亡骸に寄りすがつて泣いていたのか、ぼくは何も知ってはいない。

もちろん、捕虜になつてしまったアメリカ兵の顔がむくれ傷を負つていたのはなぜなのか、街中でさらしものになりながら街の人々に石をぶつけられたか、唾を吐きかけられたか、あるいは「人間の楯」となつ

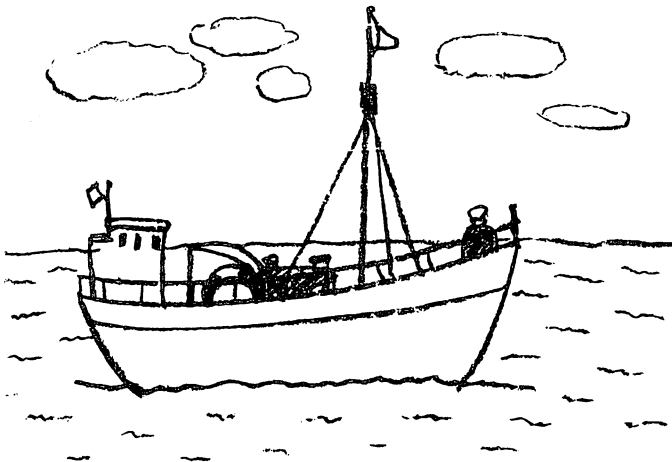
て軍事施設のなかの柱にくくりつけにされたのか、それとも地下牢のなかで生き埋めにされたのか、ぼくはまったく何も知らず知れてはいない。捕虜たちの家族についても何も知らない。

油が流される前には海はどんなに輝いていたか、コールトアルのような黒い油につつまれた水鳥たちは何を思っているのか、息もできないほどに苦しいのか、海の下の魚たちはもがいているのか、海はもう救われないのか、ぼくは、なにもわからず途方にくれながらテレビの映像を見るだけだ。

アメリカやイラクの大統領に「英雄」とたたえられ、兵士たちは死と苦痛の恐怖にどのように向かいあっているのか、志願兵なら逃げることはできないのか、イラクはついに化学兵器を使うのか、砂漠の砂は原

爆の火に焼かれるのか、油田は炎上し地球の大気はすっかり汚されてしまうのか、ぼくは何もわからず、何も知らないままなのである。

イラクの大統領の写真を胸につけ空爆で親を殺された少年が、もしも銃をかまえてぼくの前に突然立ちふさがったなら、ぼく



は言うだろう。「ぼくは何も知らない。何も知らなかったのだ。日本人が一人あたり一万円を多国籍軍に寄付して、つまりぼく自身もおそらく数万円を支払って爆弾を落ととしていても、日本の自衛隊の飛行機が中東の空を飛ぶことになっても、ぼくは何も知らなかった」と。そこにウソがあることを知りながら。

イラクの人々はアラビア語を話すというが、ハローや、ボンジュール、ニーハオ、アンニョンハシムニカ、グーテンターク、シャロームという挨拶は知っていても、アラビアの人達の挨拶の言葉を、ぼくはなにひとつ知らない。パレスチナの人々が、涙を流しながらイラクとその戦争を支持するとき、ぼくは彼らの何十年もの難民生活について何も知らなかったことを恥じる。

何も知らないのにその地の油だけには頼っていた。なぜ知らないことを恥ずかしいこととは思わなかったのか。そこから油を買っているのに、売る国の民よりも買う国の民の方が豊かなのはなぜなのか。

何も知らないとき、たずねてみる事ができる。相手のことを何も知っていないことに気づいて初めて、説得でもない、脅迫でもない、誠実な対話ができる。

耳を傾けたいと思う。絶望から希望へと向かうはるかな道がそこから見えてくるはずなのだ。



## あっちゃんのシングルライフ

1

山本 篤 江

憧れの一人暮らしを始めてから早いもので、三ヶ月半になります。

一DKの小さなマンションですが、私のお城です。今までに比べると朝起きてから夜寝るまで、誰にも手伝わってもらえないのが、少し大変ですが、そこは一人の気楽さで本当に適当にやっています。

スーパーやデパートに行ったときでも、自然と今までは見るもの買うものが、違っているんです。前だったら全然気にならなかったものが、やたら目に付くようになっていきます。所帯地味で来ている自分に、やっと長年の夢が現実のものとしているのがうれしくって…。本当は、凄くしんどいことかも知れませんが、そんなことを考えたことはまだありません。それと、家の出入りが自由に出来る事が、これほど解放された気持ちになれるなんて考えもしませんでした。経験出来てよかったです。

次回は、自立出来るまでの十年間のいささつを聞いてください。

## 新・ラッキーな人生

上平 幸雄

「ラッキーな人生」と題して色々なことを書いてきましたが、ここでもう少し補足してみたいと思います。

中学校での一年半で、義務教育の九年間の勉強をしたように書きましたが、まさかそんなことはありません。

ほんのわずかの間でしたが、中津の整肢学院に入所していたことを書いたと思います。そこで、「ひらがな」を少しだけですが習っていたのです。家に帰った後も、母親から残りの「ひらがな」を教えてもらい、それが字を読むことの基礎になりました。そのおかげで、まんがの本や、いとこのおさがりの教科書などもよく読んでいました。とくにまんがの本は、漢字の読み方を覚えるのに役に立ったようです。また、テレビは教育テレビばかりを見ていたのです。つまり、独学のようなことをしていたのです。その結果、中学になって訪問教育を始める頃に

は、小学校の四年生くらいの学力になっていました。(ただし、字は読めても書くことはなかなかできませんでした。)ともあれ、そういう基礎があったからこそ、中学校に来てみないかという話を可能にし、高校進学へもつながったのだと思います。

職業訓練校を出たものの、なかなか就職先がみつかず、やっとのことを入れてもらったその会社を、「なぜ？」辞めたのか。働けるだけでも幸せだ、と言う両親や知人の意見を無視してでも、自分の可能性に賭けた理由について少し書きたいと思います。

その会社は小さなメーカーでしたが、ぼくが入る以前から、金剛コロニーという精神薄弱者の施設と関係があり、ここで内職をしてもらったり、寮生のうち何人かは会社に来て作業員として働いていました。ぼくは電話で注文を聞いたり、伝票の整理をしたり、事務的な仕事を主にしていました。でも、その仕事が暇になると、金剛コロニーの寮生といっしょに、内職のような作業もすることがありました。ある日、そうして内職をしながら



らみんなと話していると、ある寮生が自分の将来の夢を語ってくれたのです。彼はこう言いました。「ここで仕事をしてお金をいっぱいためて、家を建てる。そして結婚して、子供をつくって、幸せに暮らすんや。」と。この言葉は、ぼくに強いショックを与えました。ほかの寮生もやはり、結婚したいとか、家を建てたいとかという、将来の夢をもっていたのです。なのに、このぼくは自分の将来について、何の夢ももっていなかったのです。障害者も人間として、あたりまえの生活を営む権利があると、このときに教えられたのです。

結婚して自分の家庭をもつというよう

な、人間としてあたりまえの生活をした  
いと考えたとき、この会社では、何年が  
んばろうとも無理だと判断し、退職にふ  
みきったのです。今思うと、なんとも無  
謀で、幼稚な考え方だったと思います。

『夢』をもつことが大切だと思います。  
そして、その夢に向かって行動すること  
そうすれば必ずチャンスは訪れると思  
います。また、そのチャンスを逃がさない  
ためにも、自分の人生は、人の意見にな  
がされることなく、自分で決めることが  
大切だと思います。

ほかに、まだまだ書きたいことはあ  
りますが、このへんでひとまず終わりし  
たいと思います。



ちよっとのぞいたアメリカ ①

大島 功

昨年の十一月下旬、ある団体の招待でサ  
ンフランシスコとロサンゼルス近辺を巡  
ってきました。

目的は、主に盲人（肢体不自由者をも含  
む）の施設訪問とそこに携わる人達との交  
流でした。短い滞在でしたが、色々な出  
会を持った中で日本と一味違うなど感じ  
たことを二、三書いてみます。

州によって法令に差異はありますが、盲  
人が、盲導犬を連れている場合、ホテル・  
レストラン・劇場・交通機関等々は、利用  
する盲人にたいし、断ってはならないとい  
う法令規制があるといます。我が国では  
そのような所を利用する時、断られる場合  
が多いのは、通達のみという弱さでありま  
しょうか。

見えない私ですが、招待を受けてデイス



ニーランドへ行った時、ミッキーマウス等  
の縫いぐるみ人形の行進があり、見ていた  
ところ、人出の多いにもかかわらず、誰一  
人として私の前に立つ人がいませんでした。  
たまたま、子供が横切ったり、間に立った  
するとすぐに両親からきつい叱責の音が聞  
こえてきました。早口の英語で、内容はよ  
く分からなかったのですが、子供に対する  
公衆道徳のしつけがゆきとどいているなど  
感じました。又、往復の機内での外人客の  
起居振舞や街中での車の流れ、人の動きに  
ゆったりとした風情が感じられたのは、広  
い国土に任んでいるだけではないゆとりと  
感じました。狭い国土で忙しく暮らす私達  
ですが、少しはのんびりとしたゆとり気分  
を持ちたいものと思えました。

ナンペイの

ひとつとふたつと。

三階建て住宅

最近、街中を歩いていてよく目につくのが三階建ての住宅。滅多やたらに地価の値上がりで、とてもじゃ無いが広い敷地をもった住宅など望めなくなってしまう現状と、それでも多少でも広いマイホームをという庶民の夢が重なって、あちらこちらで見かけるようになってきた。

狭い土地を有効に使う、という点では良いやり方かも知れないが、到底そんな立派な家に住むことがないであろう私でも、障害者としていささか気になることもある。

よく見かける三階建て住宅の場合、大抵が一階がガレージになっていて支関は二階という造り。そして、その支関に辿り着くには十段近くの階段を上らなければならぬ。おまけに階段自体もかなり急勾配。たった一段たった数センチの段差があっても

困ってしまう車椅子に乗っている者にとっ  
ては、まったくのところ考えられないよ  
うな住宅の構造である。

幸いにして今までのところ、このような  
お宅に伺うこともなかったし、ましてや自  
分が住む訳でもないのだから、「アッシニ  
ヤ カカワリノネエコトデ・・・」とほお  
っておけばいいのだ。それで済むのかも知  
れない。

ところが、持って生まれたけつたいな性  
格が災いして、そんな家のまえを通るたび  
にどうしても気になってしまう。

「あの階段を毎日上がり降りするの、大変  
だろうな」とか、「大きな荷物を持ってい  
る時はどうするんだろう」とか。「怪我や  
病気の時は大丈夫かな」などとも思う。

まったく余計なお世話だと自分でも思う  
のだが、ついつい考えてしまう。そして、  
もし三階建て住宅の住人と知り合いになる



ことがあれば、何かの話のついでに尋ねて  
みたいな、とも思う。

「この家に元気で、不自由なく、これから  
先、何年住めると思いますか？」

南光龍平

# 美智子のこんな話



岸田 美智子

川箱リの中のY子さんとの出会い

もっと外に出たい！という施設障害者の友達のあたり前の叫びに、答えたくて「施設の障害者外出サービスネットワーク」を始めて約一年がたちました。

そして、どんどん色々な施設障害者の方々に会おうチャンスに恵まれています。

親や施設の職員以外の人とは出掛けた事がない人、自分で自分のお金を持って個人的なちょっとした買い物にも行った事がない人、五〇才を過ぎてこの外出サービスを利用して初めてデパートへ行った人、二〇年ぶりに家族に会えて涙の対面となった人など、本当に今ある入所施設はブラックボックス（地域から隔離された箱）だとおもうのです。

また最近、未だに電車に乗った事がないという車椅子のC・Pで五〇才過ぎのYさんに出会いました。

Yさんはこの一月に外出サービスを利用して初めてボランテアと出掛けますが、そんなYさんは字が読めません。字を覚える機会がなかったのです。そしてYさんに、当日何時にボランテアが迎えにきたらいい？と聞くと「うわあ！私、自分で時間を決めて外出したことないの。嬉しいけど決めてほしいなあ。」などと言われたのです。私は、あつ？そうか、今までYさんには自分で選んで決めたことがない人生しかなかったんだと、ハッとしました。そして、Yさんが奪われてきたもの大きさに、私は、改めて衝撃をうけました。

このYさんにこの外出サービスの説明の為に、施設で初めてお会いした時、家族と寮母さん以外話したことがないので、とても緊張されて泣いているのかと思うほど汗をかいて、「今日は、うれしいワ。嬉しいわ。」と色々話して頂きました。これからのYさんの施設生活を、私達も共に出来る限り豊かな生活にしていきたいと思いません。

## おしらせ

三月の出会い

日時 平成三年 三月十六日(土)

午後一時～四時

場所 育徳コミュニティセンター

二階研修室(スロップ・車イスト

イレ有り)「大阪市阿倍野区阪南

町五―十五―二七」

内容 五周年記念第二弾

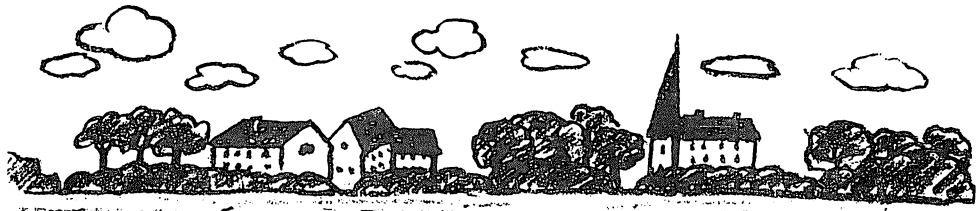
ビデオ「なんとかしてエゝな」

ロードショウ

△サロン・あべのV企画・製作

会費 なし

問い合わせ TEL 06-691-1028 (富田慶子)



井 感謝します井

カンパ・切手・冊子・お菓子等、ご協力  
ありがとうございました。

お礼を申し上げます。

一月のカンパ

金一三八五一円

井上憲一、植松菊雄、木村圭子、T・S

崎本ヒサエ、南光龍平、広岡泰枝、

まんだによしゆき、山本鈴子、

匿名二名様。  
(敬称略)

∞ サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました ∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の  
朗読グループのご協力により、サロン・あ  
べの紙の録音テープを作っていたいてい  
ます。バックナンバーは三九号から、五五  
号の分があります。五〇号は五周年記念紙  
になっており九〇分と六〇分の二本のテー  
プに収録されています。サロン紙朗読テー  
プご希望の方は、富田までお申し出下さい。

(TEL 06-691-1028)

視覚障害者向けの

ATM (現金自動受け払い機) 開発

足利銀行(本店・宇都宮市)が、全国で  
初めて「目の不自由な人が一人でATMを  
利用出来るように」と視力障害者専用のA  
TMを開発し設置した。従来のATMにハ  
ンドセット(受話機)を付け、音声案内で  
操作し、出金・入金、残高がパネルに点字  
表示される。「この機械を使えば、ひとり  
でも安心して利用してもらえ、プライ  
バシーも守れる」と足利銀行では、話され  
ている。

(日本経済新聞より)

<サロン・あべの>第56号

編集: サロン・あべの 運営委員会 定価 100円

(〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028. 富田慶子)

印刷; セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL.06-691-2365..